

# 『悪魔学』(1597年)訳註

## —承前(3)[終章まで]—

荒川 吉孝<sup>1</sup>

要旨： 以下は、スコットランド王ジェイムズ六世（1603年以降、イングランド王ジェイムズ一世）の『悪魔学』（1597年エディンバラ刊）を翻訳し註釈を施したものである。この本は三巻から成り、ここでは第三巻第四章から第六章（終章）までを取り上げる。

第四章では、悪霊に取り憑かれた人を自然の病や狂気に悩まされる人と区別する特徴について述べ、カトリック教会が彼らを治療できるとしたら、それはなぜなのかを論じる。第五章では、妖精と呼ばれる霊がローマ・カトリックの時代に広まった幻影であることを示す。第六章では、偶像崇拜の故をもって魔女に科される罰とその裁判に触れ、当代に悪魔のたくらみのはびこる原因を考察する。

キーワード： 憑依、悪魔払い、妖精、幻影、裁判、偶像崇拜、終末

### 第四章 梗概

悪霊に取り憑かれた者たち<sup>1)</sup>の説明。何故、カトリック教徒<sup>2)</sup>は彼らを治療する力があるか。

フィロマテス さて、君がひとつにまとめた二種類の霊について、疑問に思った点はすっかり君に話し、それについて納得のいく説明を聞くことができた。あとは、悪霊に取り憑かれた人について、ただふたつ質問があるだけだ。第一に、どのようにして悪霊に憑かれた人は、自然の狂乱や狂気に悩まされる人と区別できるのか。次に、一体どうして彼らをカトリック教会が治療できる<sup>3)</sup>などということがあり得るのか。この教会を我々は異端とみなしているのです、悪魔を別の悪魔が追い出すことなどあり得ないように見えるのだが。もしそんなことがあったら、キリストが言ったように、王国が分裂してしまうだろうから。<sup>[14]</sup>

エピステモン 第一の質問についてだが、その深刻な悩みを自然の病（やまい）から区別できる症状は色々ある。特に三つ、顕著な症状がある。カトリック教徒がその属性だと主張する様々な根拠のない徴候を差し引いてのことだがね。つまり、聖水をふりかけられると荒れ狂うとか、十字架を見ると後ずさりするとか、神の御名（みな）が唱えられるのに耐えられないとか、そうした無数の、取るに足らない、うんざりして、取り上げる値打ちのない徴候ばかりさ。

しかし、僕が話した三つの症状について言うと、その一つは悪霊に取り憑かれた者が信じられない力

を持っていることだ。そうでない連中の一番屈強で凶暴な男六人分より力がある。二つ目は、患者の胸や腹がひどく膨れていることだ。体内で異常な活動や激しい興奮が生じ、筋肉が固くぴんと張っている。仮に他のどんな人の皮膚を植えつけようとしても到底できないだろうな。それほど激しく悪魔は体内のすべての器官と感覚で活動しているので、悪魔に憑かれた人は、たとえ魂と感情は他の人と同じ力しかないとしても、局部的には悪魔と同じ力が働いている。最後は様々な言語を話すことだ。その言葉を患者が一度も習っていないことは知り合いがよく知っている。それも、奇妙な、うつろな声でね。しかも、話している間、口よりも胸が大きく動くのだ。しかし、この最後の症状からは、悪魔に取り憑いた時にすべての感覚を奪われた人を除外してはならない。その悪霊に取り憑かれると、口がきけなくなったり、目が見えなくなったりする。キリストはそれを取り除いて、人を楽にさせたのだ。『マタイ伝』第12章にあるように。

さて、君の二つ目の質問については、教皇派であれ、また唯一真正の宗教を信仰するとは公言しないどんな人であれ<sup>5)</sup>、誰かをその苦しみから救い出すことなど果たしてできるのか、まず疑ってみなくてはならない。次に、もしできたとして、どのような点でそれが可能なのか。

前者についてだが、疑いは二つの理由に基づいている。第一に、その治療の多くが見せかけだと分かっている。そのまやかしは、墮落した宗教を確固たるものにしようとして、聖職者があみだすのだ。第二に、本当に悪霊に取り憑かれた者を彼らが癒すことなどほとんどない、ということを我々は経験で知

1 舞鶴工業高等専門学校 人文科学部門 教授

っている。むしろ悪魔のほうが、患者を肉体の苦痛から少しのあいだ解き放つ。それにより、あるいは偽りの奇跡に誘われ、あるいは信念を固めて、邪教の門に入る大勢の者たちから、魂の永遠の苦しみを手に入れるためなのだ。前に、みせかけの治療や魔女による病気平癒を利用して、悪魔が実行すると言ったのとまさしく同様に。

議論のもう片方、即ち、もし教皇派に病気の治療ができるなら、別の考えをする学者に敬意を払いつつ、それについては、健全な信仰の持ち主が目で見たとりに行なった忠実な報告に基づいて、むしろ僕はこう考えたい。もしそうなら、教皇派がその力を持っているのは、こういうことからだろう。キリストが使徒たちに悪魔を追い出す力と権限を与えたのだ。<sup>6)</sup> それにより、使徒たちは使命を果たした。キリストが使徒たちに守るよう命じた掟は、断食して祈ることであり、悪魔払いの行為はキリストの御名によってなさなければならない、ということだった。だから、彼らのこの力は自分の能力から生じるのではなく、ただ、彼らを導くお方の力に由来するのだ。それは、ユダが他の使徒たちと同じ力をその任務に関して持っていることから、はっきりと証明されている。だから、たとえ媒介者となる人間に不完全なところが多々あっても、悪魔払いが、断食と祈り、神への呼びかけの功德によることは、容易に理解できる。偽預言者が悪魔払いをするために授かる力について、キリストみずから我々に教えてくださることと、少しも違わない。<sup>[2]7)</sup> したがって、悪魔払いのこうした面を考慮すれば、もしキリストにより定められた正しい形式を用いるなら、これを行う宗教が様々な点で間違っているとしても、教皇派にも可能だと言える。彼らは他のことでも間違いを犯しているのだから、悪魔払いの行為のほうがさらに悪いということはない。洗礼の秘跡よりもひどい間違いをほかの秘跡で彼らは犯している。<sup>8)</sup> その洗礼にも彼らは多くの空しい儀式をつけ加えている。

**フィロマテス** 確かに信心深い人の体があの不浄な霊の住居になるくらい名誉を汚されるのを神様が黙認されるとは、少なからず不思議なことだね。

**エピステモン** いま言ったように、悪魔が信心深い人の死体に入りこむという僕の議論を証拠立て、補強するものがあるのだ。なぜなら、もし魂と結合している生者の体に入ることが悪魔に許されるなら、死者の腐肉に入ることはなおさら神様がお許しになるだろう。それはもはや人間でなく、かつて人間の入っていた、汚れて腐敗しやすい抜け殻にすぎないのだから。なぜなら、キリストの言うように、人を汚すのは人のなかにもあるのではなく、人から出てくるものにすぎないから。<sup>[3]9)</sup>

## 第五章 梗概

妖精と呼ばれる第四の霊。それに関し、何があり得ることで、何が幻覚にすぎないか。これら全てについて、この対話では、どこまで、何の目的で扱うのか。

**フィロマテス** では、どうかあの第四の種類の精霊について話してくれたまえ。

**エピステモン** その四つ目の精霊は、異教徒によって、ディアーナと彼女のさすらう従者たちと呼ばれ、我々のあいだでは、妖精、もしくは良き隣人と呼ばれているのだが、ローマ・カトリックの時代に蔓延した幻影の一種にほかならない。なぜなら、悪魔によって預言することは忌まわしいと思われていたけれど、こういった種類の妖精にさらわれたり教えられたりする者は、きわめて縁起がよく、最良の生涯を送ることができると考えられていたから。そうした幻影にもとづく空しいおしゃべりには、例えばこんな話もある。妖精の王と王妃には陽気な廷臣たちがお供していたとか、すべての品物に言わば税金や十分の一税<sup>10)</sup>が課されていたとか、普通の人間のように、馬に乗ったり、食べたり飲んだり、その他なんでもしたとか。それはむしろ、ウェリギリウスの言うエリュシオンの楽土<sup>11)</sup>によく似ており、キリスト教徒が信ずべきものでは到底ない。ただし、一般に、何度も話したように、悪魔が単純な連中の感覚を惑わし、実際にはまったくそうでないものを本当に見聞きしたと思込ませる場合をのぞいてね。

**フィロマテス** だが、それでは、どうして様々な魔女が告白して死んでいくようなことが起きるのだろう。その告白によれば、妖精に運ばれて丘に行くと、入口が開き、中にはいると、妖精の女王が見える。女王は、よく考えて採取された様々な効能のある石を、軽やかな物腰で魔女たちに与えたとか。

**エピステモン** それは、前に言ったように、想像力のせいで、霊魂が肉体から抜け出しているのだ。彼らの幻想に悪魔が異を唱えるはずはないからね。すると、感覚は鈍り、眠っているときのように、丘や家、輝く宮廷とお供のものたち、そうした光景が現れては彼らを欺くのだ。その間、体は感覚がなくなっているので、石でも何でも手に持たせることができる。それをそのような場所で受け取ったのだと想像させているのさ。

**フィロマテス** でも、彼らはこのような場所で様々な人々に会ったと断言し、そうした人々の死を予言したりする。それについて君はどう思うかい。つまり、いわゆる「真実の夢」のことだが。起きて見る夢なので、連中はそう呼んでいるけれど。

**エピステモン** 彼らは嚴重に審問されていないと思うな。自分たちの予言についてあんなおざなり

の説明をしているのだから。さもなければ、悪魔がそのように魔女たちの想像力を惑わし、みずから彼らに予言してやることも、やはりあり得ることだと思ふ。ほかの時に、予言のため、悪魔が彼らにはっきり語りかけるのと同様にね。予言とは、いわば、一種の幻想にすぎない。それにより、前に言ったように、悪魔は異教徒のあいだで、よく神の真似をするのだ。

**フィロマテス** では、教えてくれ。こうした精霊は、魔女にだけ現れるのか、それとも他の者にも現れるのか。

**エピステモン** どちらにも姿をあらわすよ。無垢な者たちには、怖がらせたり、自分たちが不浄な霊よりまともだと思わせるために。それに対し、魔女たちには、無事を守る旗となり、いま言ったように、治安判事が彼女たちを罰しないようにするために。が、一方は精霊に悩まされるだけなので、憐れむべきだが、他方は、精霊によって予言を行うことで見分けられ、そうした連中は、他の魔女たちと同様、いや、むしろ彼ら以上に、厳しく罰せられるべきだと思ふ。なぜなら、こういった手合いは、真意を隠して事を行うのが常だから。

**フィロマテス** どうして精霊はあのように色々な名前がついているのだろうか。

**エピステモン** それこそ、まさに、あの悪魔の詐術だね。悪魔は、自分自身と配下の墮天使に数え切れないほど多くの偽名をつけて、降霊術師を欺くのだ。とりわけ、サタン、ベルゼブル、そしてルキフェルを三つの異なった悪霊とした。前の二つは、すべての反逆天使の首領に聖書が与えた別々の呼び名にすぎない。キリストによって、すべての悪魔の頭(かしら)はベルゼブルと呼ばれ、はっきり言うと、それにはどんな異教の悪魔払いの力もかなわない。『黙示録』ではヨハネにより、歳月を閲(けみ)する誘惑者は、すべての悪魔の頭、サタン、と呼ばれている。最後の者、すなわちルキフェルは、明けの明星の寓意にすぎない。聖書のような箇所ですら呼ばれている。<sup>12)</sup> それは彼が、つまり悪魔の頭が、墮落する前、すぐれた者として創造されたからなのだ。まさにそのように、悪魔は自分に様々な名前をつけ、魔女たちを欺くのさ。あたかも、彼が変身して装う様々な姿は、みな違った種類の霊であるかのように。

**フィロマテス** しかし、この妖精については、君が話してくれたよりも、もっとたくさん不思議な話を聞いている。

**エピステモン** その点は僕も同じさ。これまでの話のなかで語ったように。なぜなら、我々の議論は、この会合で、君が僕に、いったい魔女とか悪霊のようなものが存在するのか、彼らが何か力を持ってい

るのか、と尋ねたことから出発しているのだから。そこで、理性に照らして可能なかぎりの事例により、そのような者が存在し、かつ存在し得ることを証明するためにだけ、話の全体を組み立てたのだ。だから、それ以上深みにはまり、辞書の役を演じたり、そのために、読んだり聞いたりしたことを逐一語るのには控えよう。それは信仰の限界を越えるばかりか、黒魔術を禁じ咎(とが)めることがキリスト教徒の義務なのに、むしろそうした不法の術を教えているかのように見えるだろう。

## 第六章 梗概

魔女裁判と罰。どのような告発が彼らに対して認められるか。この時代に、魔女の数がこれほどまでに増えた原因は何か。

**フィロマテス** もう晩くなってきたので、この話を終えるにあたり、こうした魔術や魔女はどのような罰に値すると思うか聞かせてくれないか。

**エピステモン** すべてのキリスト教国の都市の法、国内法と帝国の法、神の法にしたがって、彼らは処刑されなくてはならない。

**フィロマテス** だが、どんな種類の死罪なのかな。

**エピステモン** 普通は火刑だが、これと決まっているわけでなく、法や慣習により、国ごとに違ったものが採用される。

**フィロマテス** しかし、性別、年齢、身分によって免除されることはないのかい。

**エピステモン** まったくない。法を遵守する治安判事により、そのように執行されるのだから。それ<sup>13)</sup>は偶像崇拜の最たるものなので、神の法により、いかなる例外も認められていない。

**フィロマテス** では、子供も容赦されないのかい。

**エピステモン** ああ。この結論にいささかも変わりはない。子供はそのようなことを実行するほどの理性を持ち合わせていないからね。犯罪者と一緒についてそれを告げなければ、たとえ年端もいかず物を知らなくとも、大目に見ることはない。

**フィロマテス** なるほど、君は、そうした術の秘密に与る者をすべて有罪とするのだね。

**エピステモン** その通り。なぜなら、前に魔術師について言ったように、こうした術を使う者を相談相手にしたり、信頼したり、大目に見たり、もてなしたり、そそのかしたりする者は、魔術を実践する者と同様に罪を犯しているのだから。

**フィロマテス** では、君主か行政長官が魔術の罪を犯した者を容赦したり大目に見たりすることはできるのかい。彼が知り得た何か重大な事由に基づいて。

**エピステモン** 君主や行政長官は、追訴のため都

合のよいと思う期間、処罰を延期することができる。だが、神に対するそうした忌まわしい罪と叛逆に対し、厳罰を科すよう神が命じているにもかかわらず、罰を加えず助命することは、ただ単に法に違背するだけにとどまらない。明らかにその行政長官は、サウルがアガグ<sup>14)</sup>を助けたのに劣らぬ罪を犯すことになる。だから、サムエルが主張したように、まさに妖術の罪に相当する。<sup>[4]15)</sup>

**フィロマテス** 確かにその通りだと思う。なぜなら、この罪は厳罰に値するから。裁判官は有罪を宣告するのに慎重でなくてはならないが、有罪だと確信している者に対しては、そのように重大な事件で婆さんの喧しいお喋りに耳を貸してもいけない。

**エピステモン** まさにそうだな。裁判官は、誰に有罪を宣告するか、よく考えなくてはならない。なぜなら、ソロモンの言うように、無実の者に刑を宣告するのは、罪人（ざいにん）を逃してやるのと同じほど重大な犯罪だから。<sup>[5]16)</sup>また、悪名高い人の証言を十分な証拠として認めてはならない。それはどんな法律にも立脚できないから。

**フィロマテス** では多くの犯罪の告白は被告に対してどのように働くのかな。

**エピステモン** その点については、巡回裁判<sup>17)</sup>が法の解釈をしなくてはならない。だが、思うに、君主への叛逆に関しては、女や子供、あるいはどんなに悪名高い連中でも、我々の法律では証人および証言として十分にその役目を果たす。それよりもずっと確かな根拠により、そういった証言は、神に対する叛逆罪に関しては、十分な証拠たり得る。なぜなら、魔女の所業については、魔女のほか何者が証拠となり、したがって証人となることができるだろうか。

**フィロマテス** 同感だ。魔女たちは正直者を裁判にかけたくはないだろうと思う。だが、君が言ったように、当人たちの体は何も感ぜず寝ているのに、霊魂だけ想像上の集會に出席していたと言って、人々を告訴したらどうなるのかな。

**エピステモン** だからといって罪が軽くなることは少しもない、と僕は思う。なぜなら、もし彼らの同意がなかったら、悪魔はそうした行為のために彼らの影や似姿をあえて借りることはなかったろう。そしてこのような行為に同意することは法によって死刑に処せられる。

**フィロマテス** ではサムエルは魔法使いだったのだね。悪魔が彼の姿を真似、彼に扮してサウルに応えているのだから。<sup>18)</sup>

**エピステモン** しかもサムエルはそれ以前に死んでいたんだ。だから、その不法な術に手を染めたといって彼を中傷することは誰にもできない。悪魔がそうした不法な行為に及ぶとき、誰であれ潔白な

人の姿かたちを装うことを神は許さない。それは、思うに、誰でも無実な者がそのように卑劣な背信行為を犯したとって非難されるのをお許しにならないからだ。そうしたら、最良の人々を誹謗するすべをあらたに悪魔が見出すことになるからね。

これについては、妖精に連れ去られた人達はその証拠になる。彼らが妖精の宮廷でその影法師を見た者は、皆きまってその後、男女を問わず、妖術を使った廉（かど）で裁判にかけられる。同様に、妖術によって悪霊に苦しめられる若い娘の告白により、こんなことも証明された。すなわち、彼女は自分を苦しめる様々な男女の人影を見、これらの人影が表わす人達の名前を告げたところ、彼らの一人として無罪になった者はなく、全員ははっきりと裁判を受けて有罪となり、その大半は罪を告白したのだ。そのうえ、めったに聞く話ではないが、有罪となった連中が、聞き伝えでなく目で見て仲間だと分かったと言って相手を告訴したこともある。そうやって妖術の廉で告訴された者は、はっきりと裁判にかけことはできなかったが、少なくとも極悪な生活と悪評の持ち主として公衆に知れ渡った。訴訟に際し、神は無実な者の名声をそのように気づかっているのだ。

さらに、彼らを裁くのに、あと二つ役に立つものがある。ひとつは、体に魔女の印を見つけ、それに感覚がないか試すこと。もうひとつは、体が水に浮くこと。というのも、例えば密かに殺人が犯された場合、もし死体が事件後いつでも殺人者によって処理されるなら、死体から血が逆（ほとぼし）るだろう。あたかも血が殺人者への復讐を求めて天に訴えるかのように。神はそのような自然に反した秘密の罪を裁くため、超自然の隠れたしるしを定めているのだ。まさにそのように、魔女の途方もない不敬度に対しては、それを明るみに出す超自然のしるしがある。即ち、神聖な洗礼水を振り払いその恩恵を頑なに拒む者は、水に沈まず、その懐（ふところ）に受け入れるのを水が拒絶するように定めたのだ。そうなのだ。同様に、いくら威して拷問にかけても、彼らはまず悔悛するけれど、まったく涙を流さない。そのような恐ろしい罪に対し、己（おのれ）の強情を隠すことを神はお許しにならない。さもなければ、特に女性は、どんな些細なことでも意のままに涙を流すことができるのだがね。鱶（わに）のように空涙で騙すことだってしかねない。

**フィロマテス** さて、僕たちはこの対談を時間が許すだけ続けてきた。では、もう、お暇（いとま）しなければならぬので、結論として、この国からこうした悪魔のたくらみを一掃してくださるよう神に祈ろう。なぜなら、それが今ほどこの一帯にはびこったことは、絶えてなかったからね。

**エピステモン** 僕も、かくあらせたまえ、と神に

祈ろう。だが、悪魔の所業がこのように蔓延する理由はきわめて明白だ。片や、人々の悪がこの墮落をもたらし、それにより、即ちさらに大きな悪により、神は正しく罪を罰する。片や、世界の終末と人類の救済が近づいているので<sup>[6]19)</sup>、なおさら悪魔は手先の魔女を使い、猛威をふるう。自分の王国の終焉に近いことを知っているのだから、では、これでおしまいましょう。

完

## I 原註

- [1] 「マタイによる福音書」第12章；「マルコによる福音書」第3章
- [2] 「マタイによる福音書」第7章
- [3] 「マルコによる福音書」第7章
- [4] 「サムエル記」上、第15章
- [5] 「格言の書」第17章
- [6] 「ヨハネの黙示録」第12章

## II 訳註

- 1) **悪霊に取り憑かれた者たち** 原文では“the Dæmoniackes & possessed”と分けて表現しているが、内容の上で特に区別はしていない。
- 2) **カトリック教徒** 原文の“the Papistes”は、教皇信奉者、特に教皇の首位権の擁護者を意味する。また、一般にローマ・カトリック教徒を意味し、当時のプロテスタントは、軽侮の意をこめて、カトリック教徒をこう呼んだ。
- 3) **カトリック教会が治療できる** 悪霊が取り憑くことにより身心の病が生じると考えられたため、治療として、中世のカトリック教会では司祭による悪魔払い(exorcism)の儀式が執り行われた。  
それに対し、プロテスタントは宗教と呪術を峻別し、カトリックの悪魔払いの儀式を無効とした。  
(Keith Thomas, *Religion and the Decline of Magic*, pp. 58-60.)  
キース・トマスも指摘しているように、「中世の教会によれば、神と教会の名のもとに司祭が行う正式の悪魔払いにより、悪霊に立ち去るよう命ずることができた。」(同書、570頁)それに対し、「チューダー朝の宗教改革時代、カトリックの悪魔払いと聖別の儀式の効験を否定することがプロテスタントによる攻撃の中心となった。」(同書、60頁)
- 4) **悪魔を別の悪魔が追い出すことなどあり得ない……キリストが言ったように、王国が分裂してしまうだろうから。** 「マタイによる福音書」第12章によれば、悪霊に取り憑かれて目が見えず耳の聞こえない者をイエスが癒すと、ファリサイ派の人々が「悪霊の頭ベルゼブルの力によらなければ、この者

は悪霊を追い出せはしない」(24節)と言ったのに対し、イエスは「サタンがサタンを追い出せば、それは内輪もめだ。そんなふうでは、どうしてその国が成り立って行くだろうか。」(26節)と答える。(ファリサイ派およびイエスの言葉は新共同訳による。以下、聖書からの引用は、断りのない限りこの版に基づく。)

スコットは『妖術の暴露』第15巻29章で、カトリック教徒を魔女や魔法使いと同列に論じ、彼らは悪魔を呼び出して追い出すこと、即ち、悪魔の仕事を別の悪魔によって取り除くことを引き受けている、と述べ、聖書の同じ箇所と言及している—「もし悪魔が別の悪魔を追い出せるなら、王国が分裂するようなもので、立ち行かないだろう。この論法はキリストご自身が用いたものだ。」

ジェイムズは魔女の存在を否定する『妖術の暴露』への反論として本書を執筆したが、悪魔払いに対してはスコットと共通の立場を表明している。

- 5) **唯一真正の宗教を信仰するとは公言しないどんな人であれ** 例えば、プロテスタントの非国教徒(Nonconformist)等を指している。
- 6) **キリストが使徒たちに悪魔を追い出す力と権限を与えたのだ。** 新約聖書の次の箇所と言及している。「イエスは十二人と呼び集め、あらゆる悪霊に打ち勝ち、病気をいやす力と権能をお授けになった。」(ルカによる福音書)第9章1節)
- 7) **偽預言者が悪魔払いをするために授かる力について、キリストみずから我々に教えてくださること** 「マタイによる福音書」第7章には次の記述がある(バルバロ訳により引用)。「偽預言者を警戒せよ。彼らは羊の衣をつけてくるが、内は欲深いおおかみである。…その日多くの人が私に向かって<主よ、主よ、私はあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪魔を追い出し、あなたの名によって不思議を行ったではありませんか>と言うだろう。そのとき私ははっきりと言おう、<私はいまだかつてあなたたちを知ったことがない、悪を行う者よ、私を離れ去れ>。」(15節、22~23節)「偽預言者」とは神の権威を借りて預言者を騙り人々を欺く者を指す。「その日」とは最後の審判の日。「不思議」とは奇跡のこと。「預言」の行為と「悪魔を追い出」す業とが並べられ、どちらも永遠の命にあずかる保証とはされていない。
- 8) **洗礼の秘跡よりもひどい間違いをほかの秘跡で彼らは犯している。** 「秘跡」はカトリック教会の訳語で、英国国教会の流れを汲む聖公会では「聖奠」と訳され、一般にプロテスタントでは「礼典」と訳される。原文の“Sacrament”はラテン語のSacramentumに遡り、「聖別すること、聖別されたもの」を意味し、司祭の執り行う儀式を指す。カトリ

ックには七つの秘跡があるが、プロテスタントではそのうち洗礼と聖餐のみを認めている。なぜジェイムズがここでエピステモンに洗礼を「間違い」だと言わせているのかは不明。あるいは宗教改革時代に現れた再洗礼派を諷しているのかもしれない。

9) 人を汚すのは人のなかにあるものでなく、人から出てくるものにすぎないから。 イエスの言葉

「外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである。」(「マルコによる福音書」第7章15節)に言及している。ファリサイ派と律法学者たちは、イエスの弟子の中に手を洗わず食事する者がいるのを批判した。それに対し、彼らの偽善を見抜き、イエスが弟子たちに述べたのが、この言葉である。「人の中から出て来るものが、人を汚す」のは、イエスによれば、「人間の心から、悪い思いが出て来るからである。」(同21節)ここで、イエスは人間の汚れと悪を内面化し、*The New Bible Commentary*によれば、その喩えは「宗教的含蓄において革命的であり、キリスト教徒を律法尊重主義から解放することになる。」(820頁)

10) 十分の一税 原文では“a teynd”と表記される。スコットランド(および北イングランド)方言 teind の異形で、十分の一(a tenth)を意味する。イングランド方言(標準英語)の tithe も a tenth を意味する。中世ヨーロッパで教会が農産物の十分の一を徴収し教会の維持等に充てたためこう名づけられた。

11) ウェリギリウスの言うエリュシオンの楽土 ウェリギリウス(Vergilius, 英語表記 Virgil)は古代ローマを代表する詩人。中世イタリアの詩人ダンテが師と仰いだことでも知られる。トロイの英雄アエネアスが祖国滅亡後、放浪の末、ローマの礎を築く長編叙事詩『アエネイス』(12巻)の第6巻にエリュシオンの記述がある。エリュシオンはギリシア神話で祝福された人々が死後に住む野原。

12) 聖書の様々な箇所ですら呼ばれている。ルキフェルは明けの明星を意味し、「イザヤ書」第14章12節には、次の章句がある(*Bishops' Bible* (1568)により引用。綴りは原文のまま。Long “s”はsで代用する)。“Howe art thou fallen from heauen, O Lucifer, thou faire morning childe? Howe hast thou gotten a fall, euen to the ground, which diddest weaken the nations?”邦訳は次の通り(文語訳により引用)。「あしたの子明星よ いかにして天より隕(おち)しや もろもろの國をたふし、者よ いかにして斫(きら)れて地にたふれしや」(日本聖書協会編『舊新約聖書』)これに基づき、ルキフェルは墮天使の頭サタンと同一視されるようになった。ただし、バルバロは、「ここは……、サタンのことではなく、この世の君主のことらしい。」と註している。*The New Bible Commentary*も

第14章4~23節をバビロニアの暴君の没落と死の描写と解している。

13) それ 魔女の行う術、即ち妖術のこと。

14) アガグ Agag はアマレク人(Amalekite)の王。「サムエルの書 上」第15章32~33節参照。

15) サムエルが主張したように、まさに妖術の罪に相当する。「サムエルの書 上」第15章23節に「まったくのところ、がんこは古い罪ほど重く、/高ぶりはテラフィムの罪ほど大きい。」(バルバロ訳)とある。これについて、バルバロは、「神への不従順は神を顧みずに自分の力だけで事をやろうとする点で、古いや魔術と似た罪がある。テラフィムは偶像崇拜のことである。」と註している。ジェイムズやバルバロが古いと妖術(魔術)を同列にみなしているのは、どちらも悪霊の力を借りて行うものだからだろう。

16) ソロモンの言うように、無実の者に刑を宣告するのは、罪人(ざいにん)を逃してやるのと同じほど重大な犯罪だから。「格言の書」(バルバロ訳)に次の記述がある。「悪人の悪をこらしめず、正しい人を罰することは、/二つながら、神に憎まれる。」(第17章15節)

17) 巡回裁判 英語で assize と言う。原文では“assise”と綴られている。英国で13世紀から1971年まで行われた。高等法院判事が各州を定期的に巡回し、民法、刑法の裁判を行った。

18) 悪魔が彼の姿を真似、彼に扮してサウルに忠えているのだから。「サムエル記 上」第28章にサウルが「口寄せの女」を訪れ、サムエルの亡霊を呼び出してもらう一節がある。このくだりは、『悪魔学』第一巻第一章で論じられ、第二巻第一章でも言及されている。この第三巻第六章で、フィロマトスは、悪魔がサムエルの体に取り憑いたとしてサムエルを魔法使い(Witch)だったと言うが、それに対し、エピステモンは、サムエルはすでに死んでいたのに妖術に手を染めたことにはならない、と答える。本書第一巻第一章では、サウルは妖術によって呼び出された幻影(apparition)を見、それがサムエルだと分かったが、サムエルの亡霊(the spirit of Samuel)ではなかった、という解釈が示されていた。

19) 世界の終末と人類の救済が近づいているので

この前後のエピステモンの言葉により、本書は締めくくられる。その一節には、『ヨハネ黙示録』をひとつの典型とするユダヤ・キリスト教の終末思想が反映されている。

「世界の終末」は原文では“the consummation of the worlde”となっている。“consummation”は直接には「終り」を意味するが、また、「完成」の意味も含む。この二重の意味は、キリスト教的な歴史観において歴史がその終りの日に完成することを暗示

しているかのようなのである。

末尾の一節は、「読者への序文」の冒頭、即ち「この国はいま、魔女や魔法使いといった悪魔の忌まわしい奴隷たちで満ちあふれています。」という一文と呼応する。

ジェイムズは、エピステモンという言葉を通し、この時代に悪魔のたくらみがはびこるのは、一方で人間の悪が墮落をもたらしたからであるが、他方、世界の終末と人類の救済が近づき、悪魔が最後の抵抗を試みているからだと説く。本書の根底にあるのは、時代が終末を迎えつつあるという認識である。

## 参考文献

### I. 一次資料

James I of England. *Daemonologie* (1597) / *News from Scotland* (1591). Ed. G.B. Harrison. New York: Barnes & Noble, 1966.

———. *Daemonologie*. The English Experience Series, No. 94. New York: Da Capo Press, 1969.

### II. 二次資料

Bible (Versions of the Bible):

*The Holy Bible [Authorized King James Version]*. Originally published in 1611. Cambridge: Cambridge Unive. Press, n.d.

*Bishops' Bible*. London: 1585; 1st ed., 1568.

*Geneva Bible*. A facsimile of the 1560 edition.

Mass.: Hendrickson Publishers, 2007.

Briggs, K. M. *Pale Hecate's Team: An Examination on*

*Witchcraft and Magic among Shakespeare's Contemporaries and His Immediate Successors*. London: Routledge and Kegan Paul, 1962.

Briggs, Robin. *Witches & Neighbors: The Social and Cultural Context of European Witchcraft*. New York, London, Toronto, Auckland: VIKING, Penguin Books, 1996.

Davidson, F., ed. *The New Bible Commentary*. London: The Inter-Varsity Fellowship, 1953; 2nd ed., 1954.

Scot, Reginald. *The Discoverie of Witchcraft*. Ed. Montague Summers. 1930; rpt., New York: Dover Publications, 1972.

Sprenger, Jacobus and Heinrich Kramer. *Malleus Maleficarum: The Hammer of Witchcraft*. Trans. Montague Summers, ed. Pennethorne Hughes. London: The Folio Society, 1968.

Thomas, Keith, *Religion and the Decline of Magic*. 1971; rpt., London: Penguin Books, 1991.

上山安敏『魔女とキリスト教—ヨーロッパ学再考—』(1993年; 講談社現代学術文庫、1998年)

『キリスト教大事典』改訂新版(教文館、1968年)

聖書:

『舊新約聖書』文語訳(日本聖書協会、1972年)

『聖書』新共同訳(日本聖書協会、1988年)

『聖書』フェデリコ・バルバロ訳(講談社、1980年)

『聖書思想事典』(1970年; 日本語版、三省堂、1973年)

バッシュビッツ、クルト著、川端豊彦・坂井洲二

訳『魔女と魔女裁判—集団妄想の歴史—』(法政大学出版局、1970年)

(2012. 1. 10 受付)

## *Daemonologie* (1597): A Japanese Translation with Notes

—Continued from my previous article (3) [To the final chapter]—

### Yoshitaka ARAKAWA

**ABSTRACT:** This is a Japanese translation of the *Daemonologie* of King James, the Sixth of Scotland (from 1567) and the First of England (from 1603). The treatise, which is in the form of a dialogue between Philomathes and Epistemon, consists of three Books. The present issue contains the fourth, fifth and sixth (final) chapters of the Third Book. The First Book appeared in *Notre Dame Seishin Junior College Faculty Research Bulletin*, Nos. 22 and 23. The Second Book appeared in *Bulletin of Maizuru National College of Technology*, Nos. 40 and 43, while the first three chapters of the Third Book in No. 45 of the *Bulletin*.

The fourth chapter describes the features which distinguish the persons possessed by evil spirits from those who suffer from natural diseases including madness, and discusses the reason why the Catholic Church is supposed to be capable of curing them. The fifth chapter deals with the spirits called fairies,

showing that they are illusions prevalent in the age of Papacy. The final chapter refers to the trials and punishments of witches especially for idolatry, and, by way of conclusion, considers the reason why the devil's practices are so rife in the present age.

**Key Words:** *possession, exorcism, fairies, illusion, trials, idolatry, the consummation of the world*